

---

# 魔法使いの少年

stone-force

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法使いの少年

### 【Nコード】

N7304M

### 【作者名】

stone-force

### 【あらすじ】

わたし高町なのは。今年で小学二年生でみんなからはなのはってよばれるんだ！

今日はいつも一緒に帰るともだちがいないからいつもと違う公園からおうちに帰ることにしたんだけど……男の子（？）が倒れてる！！？どうしよう？

これが、わたしと彼のちよっぴり運命的な出会いだった……

## 終わりと始まり始まり。(前書き)

今回のこの小説が人生初の二次創作というものであったりします。駄文、誤字脱字、構成矛盾なんかは、やんわり指摘してくれると作者は眼の前にニンジンをぶら下げられたロバみたいに頑張るので、いろいろコメントをお願いします。

終わりと始まり始まり。

星が降る夢だった。空いっぱい広がるかすかな光は、お互いを紡ぎいつて古人たちが創造した神話を語る。

きつと、それは何もなければキレイと思うだろうけど今の僕にそんなことわかるわけ無くて。ありがとうと淡々とした口調で紡ぐ。突然に感謝の言葉を口にして少し驚いたようだけど、ぼくの考えに気付いたからか今度は目を見開いてまくしたてるように言う。一人ではダメ、と子供が駄々をこねるように。

ぼくは、曖昧な笑みで答えてあげるしかなかった。

大丈夫だよ。お互いもうぼろぼろで、これから何ができるのだろうと思うぐらいクタクタで。そんなカツコウで意味がないこととはわかっていてもこれまでぼくを導いてくれたひとたちの思いだけで立ち上がる。ちっぽけな自己満足かもしれないけど。

立ち上がるのと同時に必死にもがいて一人で行くのを止めようとするけど、ぼくは半ば無視するように背を向けて、あちらからみれば星空が写ってるんだろうな場違いなことを思いついて、と後は任せたと伝えて、

『約束の地』へボロボロになった戦友とともに、向かった。

## 終わりと始まり始まり。(後書き)

なんか、初めての二次創作だからかもしれないのですが原作キャラの固有名詞をタイプするのがものすごく恥ずかしかったです。今回はまだ誰も登場してませんけど……パソコンの前でわけもわからず身もたえする作者……気持ち悪いですね!!

## オリ主 設定（前書き）

本編は次回から始めることにします。

## オリ主 設定

とりあえず主人公だけで。あとから徐々に追加していきます。

主人公 名前： 高町<sup>たかまち</sup> アーリン

性別：男の娘

身体データ

身長はクラスの中で平均ぐらい（女の子も含む）で体重も平均。本人はわからないと言っているが外見はハーフで女顔、黒髪に翡翠色の瞳が印象的で初めてなのはに会ったときは左目に大けがをしていたので現在は元の瞳と同じ翡翠色の義眼をはめている。

デバイスの名前と設定

アルバス（インテリジェントデバイス）AIは男性で冷静沈着でシブめの声をしている。暴走しがちのアーリンを抑える良きパートナー。マスターが記憶喪失のため能力や設定に謎が多いがアーリンの指示

には基本的は従う。通常ではクロスをかたどったネックレスの形状をしている。

Form Lance lot：アルバスで近距離戦闘をするときのモード。通常時のクロスが巨大化し剣となって白衣とマントを混ぜたような純白のバリアジャケットも展開される。魔力光は白銀と蒼が混ざってる。

魔力変換も『氷』で斬ったものを凍らせる能力がある

その他いろいろな設定

当時小学二年生だったなのはに公園で倒れているところを発見され一時高町家で生活をするが、本人が記憶喪失で搜索願もなかったことから養子となった。名前は桃子が彼の外見と性別を勘違いして誤ってつけてしまったのだが、本人は気にしないということである。活発で明るい性格をしているが、そのためケンカことも多く士郎と恭也からよく注意される。頭脳明晰で趣味は読書と少タイムリー臭いが表に出さないようにしてる。マンガも人並みに読む。好物は甘いもの。ちなみに彼は家族を名前で呼んで「父さん、母さん」とは呼んでいない。



## オリ主 設定（後書き）

頭の中でいろいろできてはいるのですが、文にするのがムズカシイです。

## 日常と平和（前書き）

これから本編です。

見てくれる人がいるかどうか分かりませんが、頑張っていきます。  
書き忘れていましたが、筆者が本編を見たのは3年以上前なので細かい設定のつじつまが合わないのはあしからずに……

## 日常と平和

「また……あの夢か」

目覚めたばかりのぼくは夢の内容を思い出す。顔も声も確かに覚えてはいるようだけど目覚めてからではそんなことはすぐにウヤムヤになってしまい忘れてしまう。いつものことだと自分に言い聞かせてベットから抜け出す。

ただ今の時刻は午前4時半。世間一般の人たちから見れば早朝と呼ばれるこの時刻から高町家の稽古が始まる。ぼくも参加するようになってもう何か月も過ぎたので、はじめはメチャクチャきつかったけどもう慣れた。きつと目隠しをしてでも同じように行動してしまっただろう。

まず、初めに今まで来ていたパジャマを脱ぐ。そして何カ月も稽古をともししている相棒のジャージを身につけて洗面場にで顔と歯を洗う。寝ぼけ眼で歯ブラシをシャカシャカしている顔を鏡で見つめていると、鏡に人影が現れる。

「ん……アーリンか、朝から早いなお前は」

「おはよう、そういう恭也だつて十分早いさ」

この人は高町恭也。大体一年ぐらい前、道端で大けがをして倒れていて記憶喪失だったぼくを今現在まで養ってくれている高町家の長男さんだ。父親そっくりな黒い髪に日焼けした褐色の肌とがちりとした体つきはとても男らしく、かつこい。性格はクールなのだがシスコンの疑惑があるらしく本人はかたくなに否定している。どうやら『妹思い』というのは世間からいろいろ言われるらしくなかなか認めようとしめない。

（悪いことじゃないと思うんだけど……どうして認めないのかな『シスコン』）

「何か俺の顔についてるか？」

「いいやなんでもない気にするな」

どうやら恭也に指摘されるまでガン見していたらしくあわてて否定する。

ぼくと恭也は支度を終えて家の玄関前に出る。

「今日は少し遅れたみたいだな、恭也にアーリン？」

「そーだねー、恭ちゃんとアー君が二人そろって登場っていうのもめずらしいし、なにかあったの？」

すでに玄関先で待っていた二人が声をかけてくる。

はじめに声を掛けてきた人が、高町士郎。いわずとした高町家のお父さんで喫茶店『翠屋』のオーナーも務めている。恭也よりもさらにがっちりとした体形でさらに高身長だ。イメージは『マトリョーシカ』っていうどこかの人形みたいな感じ。でもこちらの大きいほうは小さいほうよりも覇気と自信がケタ違いに大きい。

その次に声を掛けてきた人が、高町美由紀。恭也の妹で高町家の長女。文学少女って感じの容姿に少しはかなげな印象があるが士郎や恭也ほどではないにしろ体から滲んでる覇気がその印象を打ち消している。ちなみに彼女は桃子さんよりも士郎さん似で黒い髪を長い三つ編みで束ねてる。

「大したことはないさ、ちょっと寝坊したら洗面場にこいつがいたから一緒に出てきただけだ」

「そうだね、ぼくもちよつと寝坊しちゃったけど……」

そこで美由紀がくすくす笑った。どうしたんだろ……

「だって二人とも似た理由だったからついね、いつもはそんなに仲良しってわけじゃないからさ」

そう思ったかと思ったら今度は声をあげて笑いだす。なんかいろいろ複雑な心境かと思っっていたらそれは恭也も同じだったらしく抗議の声を上げようとしたら、

「無駄話はこれまでだ、あんまりこんなことで時間をとっていたら稽古の時間がなくなるぞ」

「そうだね、じゃあもういいっか」

士郎さんがそう声を上げたのと同時に美由紀は脱兎のごとく走り

出す。

「あつ、待て！まだ話はついてないぞ！？」

恭也が追いかける

「やれやれあいつらは……いつまでたつてもあんなだからな」

「まあまあ、仲が悪いよりマシだしそれより二人を追いかけないと  
もうそろそろ見えなくなるし」

「そうだな、じゃあ行こう、二人とはルートが同じのはずだから大  
丈夫だろう。今日は少しペースを上げていくぞ、準備はいいかアー  
リン？」

士郎さんが走りだしたのでばくもあわてて追いかける。眠気はと  
つくの昔に冷めていた。

朝の訓練が終了し家に帰宅するとリビングのほうからいいにおい  
が漂ってきた。

「あら、おかえりなさい。もう朝ご飯はできてるわよ」

ぼくらを出迎えてくれた人は、高町桃子さん。茶色く長い髪と白  
い肌は彼女の実年齢を知るのには向かないぐらいきれいで二人の子  
持ちには見えないほどだ。高町家のお母さんとしてみんなの世話を  
焼いたり『翠屋』の手伝いをしている。そのせいか料理がとても上  
手でなんでも器用にこなす。ぼくのこの『アーリン』って名前も桃  
子さんが付けてくれたり、学校に持っていくお弁当を作ってもらっ  
たりいろいろお世話になってる。

「おはよう桃子」

「おはよう母さん」

「おはようお母さん、なのはつてもう起きてるの？」

「いいえまだなのよ……じゃあ折角だしアー君に起こしてきてもら  
おうかしら？」

おはようって言いかけたばくに衝撃の言葉が向けられる。なんで  
いきなりぼくがでてくるんだ、と尋ねようとしたところばくよりも

はるかに早く返した人がいた。

「なんでわざわざこいつにそんなことをやらせる、美由紀にやらせればいいだろう？」

恭也だった。なんとなく『シスコン』の意味がわかったような気がしないでもない。

「だって、恭也も美由紀も汗だくじゃない。ふたりがシャワーに行つて帰ってくるのを待ってたらなのはとアー君がバスに乗り遅れるかもしれないし、その分アー君はあんまり汗をかいてないように見えるから二人よりも適任だと思つたからよ」

「……なら、母さんがいけばいいじゃないか」

「わたしは見ての通り、朝ごはんの支度があるからため、アー君が適任なの」

反論むなしくコテンパンにやられた恭也はこつちをじろりと睨む。

……ぶつちやけ半端ないぐらい怖いです、まじで。

「ほら、アー君睨んでないでさっさと行くよ？」

恭也は美由紀に引きずられていった。

「じゃあアー君は、なのはのことはお願いね？」

桃子さんも料理のほうに戻つたらしい。

「私もこれから喫茶店の準備があるから後は任せたぞ？」

士郎さんも翠屋のほうに行つてしまった。残されたぼくは一人のため息をついたけど、誰も聞いていなかった。

階段を上がりなのはの部屋の前まで来た。

「なのはー、朝だぞー、起きろー!!」

ドアをたたきながら呼びかけるが反応なし。たまに寝坊するとしてもいつもはもう起きている時間なのでとりあえず呼んでみたもののだめだった。しょうがねなーと呟きながら部屋にいと、やはりこの部屋の主は絶賛爆睡中だった。

「なのはー、もう起きないとマジで遅刻するぞー？」

今度は体を揺さぶってみるが効果なし。今までここまでして起きなかった経験はなかったのではし考えてみる……とりあえず、や

つてみる価値のありそうなものをやる。なのはの小さい鼻と口を同時に抑える。そう、息ができないくらい……

「！！？？」

つかの間、苦しそうに身をよじって急に眼を開けたなのは涙目で叫ぶ。

「こほこほっ……朝からなんでこんな……ひどいことするの！アー君？」

「それはいいがかりだ、なのは。ぼくは何度か声だけで起こそうとしたけど反応しなかったし体をゆすつても起きなかったんだからしようがないだろう？」

「でっ、でもでももつと優しい方法で起こしてほしかったよ……」

「いつもと同じやり方で起きれなかったからだろ？ だったら、他にどんな起こし方があるんだ？」

「えっ！！それは……ごによごによ」

「きこえないぞ、なのは」

瞬間、なのははあわてて手を振って、

「なんでもないよ」

と言つてベットに顔をうずめてしまった。

「なんでもいいから早く起きてこいよ、もうみんな起きてるんだからな？」

そう言つてなのはの部屋から退出する。そういえば紹介が遅れたな。いまのが高町なのはでぼくと同じ小学校に通う同い年の高町家の末っ子だ。土郎さんよりも桃子さん似的容姿で茶色いセミロングの髪をしており肌も白い。勉強は理数系は得意だけど後の科目はぼちぼちやぱつとしないとか、運動神経は残念ながらよくなく体育の授業のときはいつも憂鬱そうな顔をしている。数ヶ月前、道端で倒れているぼくを発見してくれたのもなのはであり命の恩人ともいえるし学校での友達もなの派を通じて出会えたしそういう面では、土郎さんと桃子さんよりもお世話になっている。

（まあ、確かに感謝してるけどね）

そんなこんなでしたの階に降りるとすでに朝ごはんの準備は整ったらしくリビングからいいにおいがする。ドアを開けてリビングに入るとおいしそうな（実際おいしいのだが）ハムエッグや新鮮で色鮮やかなサラダが並べられていた。

「あら、なのははちゃんと起きていたかしら？」

とすでにシャワーから戻った2人とともに朝食を食べている桃子さんが声を掛ける。

割とすぐに起きたと答えながら自分の席（男女別に分かれて年齢順に並んでいるのでぼくの隣の席は恭也で向かいがなのはだ）にすわろうとすると……桃子さんが

「ご飯の前にシャワーを浴びてきなさい、汗臭いままじゃ学校に行けないでしょ」

と言たので、おとなしく従うことにする。ぼくがシャワーを浴びるためにリビングを出て行ったのと同じぐらいのタイミングで制服のなのはが入ってきた。

「おはよう……みんな、あれアー君は？」

「シャワーを浴びに行っている、しばらくしたら戻ってくるだろう」

恭也が答える。

「でも、本当に今日はぎりぎりね、アー君にはすぐにご飯食べと貰わないとバスに遅刻しちゃうわね」

「ううー、ごめんなさい」

美由紀の何げない一言になのはは申し訳なさそうに言うが桃子がフォローする。

「とりあえず、なの派はすぐにご飯を食べること。本当に遅くなったらお父さんに送ってもらえばいいしお父さんはもうご飯も準備も済んでるしね」

じゃあそうする、となのはは答えて桃子が焼いてきたトーストを食べ始める。

ほどなくして、シャワーを浴び制服に着替えたアーリンがリビングに戻ってきて遅れながらもトーストを食べる。そして、2人が同



時に食べ終わってしばらくしたらいつもの時刻にいつものバスがやってきた。

「それじゃあお父さんお母さん、行ってきまゝす!!」

「ぼくもいつてくる、士郎に桃子!」

なのはとアーリンはかばんを持って玄関先に見送りに来てくれる両親に元気よく挨拶する。

「行ってらしゃい2人とも転んで怪我しないようにね?」

「ああそうだな、元気なのはいいがはしゃぎすぎるなよ?」

「はあゝい!!」

今日も2人は元気に登校する。

この日から二人の運命の歯車が少しずつ回っていくのだと気づかぬままに。

## 日常と平和（後書き）

こんな文章書くのに一体何時間費やしたのだろうか……

本文中のアーリンは土郎と桃子に「さん」付けでよんですがこれは彼が2人に対し尊敬しているからです。でも実際呼びかけるとき「さん」がないのは家族の間で「さん」付けはおかしいと2人に指摘されたからです。

多分これからはこんなグダグダした感じで進みますし更新も不景気ななと思うんですが、それでも付き合っていただけなら筆者はみなさんにこれまでにない感謝の気持ちをささげたいと思います。

## 未知と遭遇（前書き）

無印とA's編はとつと終わらしてオリジナル編をやりたいな  
とか思います。

まだ具体的な感じは決まっていなくて、いろいろ問題もありそうな  
ので（構造とかネタとか）なんとも言えませんけど……

## 未知と遭遇

時は流れて今は昼休み。退屈な授業ないったん終わりを告げてささやかな解放感に包まれる。

ぼくはかばんから朝作ってもらったお弁当箱を取り出そうとする  
と上から声が降ってくる。

「アー君、一緒にご飯食べよう？」

なのはだ。ぼくのお弁当と色違いのピンクのナプキンで包まれたものを掲げながら誘ってくる。

「さっさとしなさい、昼休みが終わっちゃうでしょ」

このどことなく命令口調なのが、アリサ・バニングス。金髪と勝気なつり眼が特徴的でかわいい外見をしているけど、強気な性格が体からにじみ出ている。土郎や恭也とは少し違うタイプの覇気って感じ。さすがお嬢様だ。

「まあまあアリサちゃん、まだ昼休みは始まったばかりだしそんなに急がなくてもいいんじゃない」

そしてこっちの穏やかな感じな子が、月村すずか。黒い髪を白いカチューシャでまとめている点も相まっておとなしい印象というか儂いというかそんな感じがする。『月村家』というこの地方を代表する名家のお嬢様であり、なぜかしら見た目の印象と異なり運動神経が半端なく高い。お嬢様にもいろいろいるもんだ。

「だめよ、限られた時間を使いこなすにはきちんとした計画と努力が大事なの。短い時間ぐらいどうってことないって思っている奴から損するものなの」

「そうかもしれないけどそんなに急いだらもつたいないじゃない、昼休みだし」

「そういう考えがだめだといってるのよ！」

「あのさ、2人ともぼくは準備できたよ？」

本格的に議論が始まる前に2人を抑える。短くはないが長くもな

い時間を無駄に過ごしたくないって点にはアリサに賛成だし、なのはが少しおろおろしていて2人を止めるには時間がかかりそうだからだ。

「なら早く行っちゃいましょ、場所も確保しないといけないし」

一人早足で教室の出口に向かうアリサ、それに残された3人がついていく形になる。

「ちょあつと、まったー!!」

しかし、入り口付近から1人の少年がアリサたちの道をふさぐ。

「だれよ、あんた？」

「おいおい忘れちゃ困るぜ、このクラスどころか、学年でもトップクラスの成績を誇ってるこの進藤正義のことをなあ」

あ、マサだ。何してるんだろうあいつ？

「もしかして、アー君の友達？」

「そうだ、そこにいるアーリンとは友達だ」

なのははばくに質問したのにマサが答えたので少し驚いているようだった。

「で、なんのよう？ ぼくらはこれから昼ご飯を食べに行くんだけど

……」

「それだよ、お前がいないと話が盛り上がらないから今日はオレらと飯食おーぜ？」

「ちよつと何よそれ、アーリンはわたしたちとご飯を食べるって言ったんだからあんたなんか口を挟まれたくないわ」

ぼくの代わりにアリサが答えるけど、やっぱりこの二人は相性悪いな。2人とも我が強いからこうなるのはしょうがないかもしれないが。

あいつの名前は進藤正義。自分で言っていた通り成績は極めて優秀かつ運動神経もよい。茶色がかった髪を短髪にしており活発な印象を与える。性格も明るくてみんなに慕われヤツがいるクラスではいじめが起きなかったという都市伝説みたいなことも起きたらしい。ちなみにぼくの同性の友達第一号だ。

「お前が勝手に拉致してるようなもんだろ。それに最近ずっとお前たちに付き合ってるなら1日ぐらいいいじゃねーか？」

「あんたが誘うのが遅いのがいけないんでしょ」

なんだとおくっというってマサがアリサをにらみつける。

一触即発の空気が教室の入り口付近を満たす。さすがにまずいと思っただけはふたりの間に割って入る。

「落ち着けて、今日はアリサたちで明日がおまえてことで解決じゃないか、な？」

二人の視線がはずれる。

「……しょうがないわね、私だってこれ以上時間を消費したくないからそれでいいわ」

「……まあ、それが一番無難だな。今回はそれでいいか」

じゃあ、明日は絶対だからな？と念を押して言ってマサは自分のグループに戻る。融通のききやすさもあいつの長所だ。

「じゃあぼくもいこっか？少し遅れちゃったみたいだし」

「そうね……そうしましょ」

すたすた歩いていくアリサ。今度は4人で固まっていつもの場所に向かう。

「さっきのアー君、すごかったね」

「すごいってなにが？」

4人でお弁当を突つついていると思いついたようになのはが言ってきた。今は屋上、吹き抜ける春風が解放感をさらに高めてくれる。

「さっきのアリサちゃんと進藤君のことだよ。わたしなんか声もかけられなかったのにあつという間にけんかを収めちゃって。これも稽古の成果なのかなあ」

適当に相槌を打って流そうとしたのにさすがが話題に乗ってきた

「そうだね。初めて会ったときは頼りなかったのに今じゃあ結構けんかとかも抑えてくれてるし、稽古の成果は十分出てると思うよ」  
「確かに、転校初日なんてよくこんなやつがこの学校に入れたものだわって思っていたし」

だんだん話が思いもよらない方向に移ってきた。本人のいる目の前でそういう思ひ出話は正直メチャクチャ恥ずかしいからやめてもらいたいんだけど3人だけでどんどん盛り上がりすぎて行ってしまふ。きつとこの手の話は3人が満足するまで続くのだろう。一度決壊した河川の氾濫は嵐がやむまでおっさまらないように。

嵐がやんだ頃には昼休みもほとんど残っていなかった。

放課後、授業から解放される。今日も一日ご苦労様でした。

昼ごはんの時の3人とはここでいったんお別れ。3人には塾があるけどぼくは通っていない。放課後に自分から進んで勉強するなんてとてもじゃないができないし、翠屋の手伝いや稽古をするほうがぼくには向いている。といっても、今日は二つともお休みだったのでマサの家で遊ぼうかと思って声をかけたところ家庭教師が来るそうでそんな時間はないとのこと。完全に、暇を持て余していた。

「しょうがないか……」

ぼくはひとり、家に向かって歩き出した。

帰り道の途中で特に何かあるわけでもなくそのまま家に着いた。士郎さんと桃子さんにあいさつしてそのまま部屋で制服からパジャマに着替え、昼寝をすることにした。今朝は奇妙な夢を見たせいか少しね足りないし宿題も特に大したものではなかった。

軽く眼をつぶっているだけのつもりだったのに、いつの間にかぼくの意識は深い眠りに落ちた……

空は漆黒に染まっていた。どこまで行っても深いクロの光景に三半規管が狂って自分がどんな状態さえも確認できなかった。でも『落ちている』って感覚はないからぼくの足はきつと地面についているのだろう。そう思ったら下のクロがねずみ色に代わる。そこからクロに伸びているねずみ色の柱が普段からとおっている通学路の電柱だと気付いた。そこに気付けばもう簡単、深夜の通学路があたりに存在していた。

（ぼくは寝ていただけなのに、どうして？）

そこで駆ける小さい影。あの姿は……

（なのはが、どうして？）

小さい何かを抱えたまま走っているあの姿は義理の家族の末っ子だった。そのあとから追いかけてくる大きな『クロ』には口がないがまるで彼女を狙う猛禽のようだった。

（助けなくっちゃ……！！）

しかし、そこで空に桜色の稲妻が、漆黒の空を切り裂く。彼女を守るように。

（なのは……！？）

アーリンは桜色の稲妻のあまりの眩しさに目をつぶってしまう。そのまま、彼は夢から覚めて行った……

「今の夢って」

よくわからない『クロ』いものが出てきた。でも今朝見た夢でも同じくらいわけがわからなかったしその点では今までは変わらな。けど、確かになのはが出てきた。これまでの夢の中で特定的人物を覚えてるなんて初めての経験だからだろうか、いやな予感がする。時計はとづくに深夜を指していた。

「まさかね……」

そう呟いて玄関の靴を確認する。偶然か、なのはの靴だけ見当たらない。予感が予想に変わった。



アーリンは、自分の靴を部屋に持っていき急いで着替えてそのま  
ま二階の窓から飛び降りた。

「なにもなければ、それに越したことはないんだけどね……」

呟きながら、夢で見た通学路へ全力で向かった。そらはやっぱり  
漆黒に染まっていた。

アーリンがそこに着く前に予想は現実が変わっていた。アスファ  
ルトは剥がれ電柱は飴にみたいに曲がっていた、どう考えても異常  
だった。

「頼むから間に合ってくれよ……」

でも自分に何ができるのだろう、あんな化け物は大の大人だって  
どうにもできないはずだし、ましてや子供の自分に何ができるのか。  
もう考えても遅い、足はもう夢の場所に向かっているしこのままな  
のは1人を見捨てるわけにもいかなかった。

しかし、不思議なことにアーリンの中には単になのはを助けると  
いう気持ちしかなかった。その理由を深く考えないままとうとう夢  
の通学路に着いた。

「まだ来ていないのかな？」

勘違いってことはないだろうしいったい何が違ったのかと思っ  
ていたら、不意に轟音が鳴り響く。

来た……！！と思った瞬間、見覚えのある姿が見える。

「なのは！」

アーリンが声をかけると信じられないものを見た顔で、叫ぶ。

「アー君！？どうしてここに！？！？」

「話は後だ、逃げるぞ！！」

なのはの手を強引につかんで走り出したものの、2人ともほとん  
ど限界だったせいで化け物との距離は広まらない。むしろ、じわじ  
わ縮んでいるようだしあんなものに体力が存在するのも疑問だっ  
た。

「どうしよう……このままじゃ追いつかれちゃう」

なのはが涙目で問いかけてくる。

（どうする、二手に分かれたからって確実に逃げられるわけじゃないし何よりあの化け物に関する情報が少なすぎる……）

「仕方ない……なのは！」

いきなり、なのはの名前が呼ばれた。その声の方向にはへんなイタチ（？）みたいな生物がなのはに抱かれていた。

「イタチ（？）がしゃべった？！」

驚愕の新事実だ。人間以外に人語を使う生き物がいたなんて……「ぼくについてはまた後で説明します！！ですからいまはぼくの指示に従ってください！！」

お、おおくと情けない返事をしたアーリンは動揺を隠せないし、隠せるほどの余裕もなかった。

「それじゃあぼくたちは次の角を左に曲がるので、あなたは右に曲がって隠れていてください！！」

300メートルほど先にT字路が見えたからあれのことだろうと思う。いまだに手をつないだまま走ってるなのはの顔を見る。もう体力の限界といった面持ちで心配になってしまふ。そんなアーリンの視線に気付いたのかなのはは精いっぱい笑顔で、

「大丈夫、私が……どうにかするから、任せて？」

そこで、ふたりは左右に分かれた……

アーリンは振り向いた。あのイタチ（？）は一体何をするつもりなのだろう、気になって仕方がなかった。どうやら電柱の陰にまわって何かをするらしい。

化け物はやっぱりなのはたちのほうに向かいその距離はみるみる縮まってゆく。わずか数メートルを残すだけとなった。

空から桜色の稲妻が、なのはを守るように空を切り裂く。その際の衝撃が数十メートル離れているここまで伝わってきた。

（すごい……よくわからないけどものすごい力だ！）

桜色の粒子があたり一面を雪のようにあたり一面を照らしている。

そんなときだった。誰かに呼ばれたような気がした。しかしあたりは非日常以外なにもないただの住宅地だ。

《マスター、こちらです》

つい先ほどまでなのはと手をつないでいた左手に今まで見たことのないクロスが握られていた。

「今度は無機物かよ……もうここまできたらなんでもいいかもしれない」

《わたしのことはまたあとでお話します。ですから今は私の名前を呼んでください、そうすれば彼女を助けることができます》

「なのはを助けられるのはいいけど、ぼくはお前の名前なんて知らないぞ？」

《大丈夫、あなたは識ってます。わたしはマスターの魂と呼ぶべきものの結晶のようなものですから》

左手を握りしめる。クロスが手にくい込ん痛みで現実のことだと痛感させられる。

（今はまだ分からないことが多いけど……）

落ち着いて深呼吸をする。一呼吸…二呼吸…。

今まで何があつたか思い起こす。そんな中でわかったことが一つあった。

「あのなのはが戦うならビビってる暇はないよなあ！！アルバスト！！」

《That's right!! Form Lancelot set up!!》

## 未知と遭遇（後書き）

こんな文章書くのに5時間以上費やしてしまいました（笑）  
できればもっとスマートにしたいですねー

## 変化と覚醒（前書き）

更新が遅いのは筆者のせいですが気長に待ってやってください。

## 変化と覚醒

「ふあゝ」

いつもの習慣通り午前四時半に起床した。今日は早朝稽古がないのでこのまま二度寝してしまうのも悪くはなかったがきつと夢でも昨日の出来事がよみがえるだろう。

「魔法……か」

昨日のイタチが言うには、彼はこの世界のもでなく別の世界から来てここに『落し物』を探しに来たらしい。名前はジュエルシードだったか？昨日の化け物のように何かの生物に憑依してその願いをかなえようとする実に厄介な代物、ロストログアの1つらしい。憑依したものに強大すぎる力を与えるジュエルシード、もし悪用しようとするならむ手に渡ったら……イタチはそんなことを考えるわけか。

でもこの世界には魔力を持つ人間は極めて少数らしくそこまであせらなくともいいと思うのだが、昨日の化け物のようにどんなことにつながるか予想できないためやはり早めに回収したいとのこと。

その理屈も理解できるしそんな危険なものはさっさと持って帰ってほしい。しかしイタチには魔力なるものが残ってないらしく今すぐに回収作業に復帰するのは不可能でしばらくの間でいいから手伝ってほしいらしい。ぼくとなのはの二人で……

詳しいことはまた明日じっくりと話し合って今後の方針を立てるから、昨日はこれでお開きとなったわけだが……

「ん~~~~にやあゝ」

昨日の化け物イベントが終了して無事この家に帰ってきてぼくの部屋でイタチの話を聞いていたらいつの間にかなのはが僕のベッドで寝てしまっていた。どうやら疲労困憊だったらしく何度起こしても無反応を貫き通す。

いつものように鼻と口をつまんでやろうかと思ったのだがかわい

そうだったのでもそのまま寝かせてあげた。ぼくの部屋にはベッドの代わりになるものが他になかったので仕方なく一種に寝たというのが昨日の顛末。

「はあ」

誰も聞いていないのをいいことに大きなため息をつく。なんでこうなったの……

「あ、おはよう……ございます」

「イタチか……まだ寝ていてもいいよ？きのう中に知っておきたいことは大体わかったし」

「ぼくはイタチじゃなくてフェレットです……じゃなくて、昨日のうちにあなたの名前を聞いてなかったので教えてくれませんか？ぼくはユーノ・スクライアといいます」

「そういえばそうだね僕の名前は高町アーリン。なのはと同年だよ」

「じゃあやつぱり女の子ですか？昨日のバリアジャケットはズボンだったけど、なのはとも仲がいい姉妹みたいだし」

「いや……ぼくは男だよ」

ポク、ポク、ポク、チーン……

「ええええええっ！？！？！？！？！？」

もういいよ、その反応慣れてるから……

「じゃあ姉妹じゃなくて兄妹なんですか！？」

「どっちかていうと姉、弟だね。ぼくは孤児だったから養子って形で高町家に入ったんだ」

「いわれてみれば……全然似てないですし、すみません変なこと聞いちゃって」

ユーノの頭が申し訳なさそうにちょこんと揺れる。

「いいよ気にしてないし、それより下でシャワー浴びてくるからその間なのはをよろしく。大きな声は出さないでね？家のほかの人に気づかれるのはめんどくさい展開になりそうだし」

着替えをたんすから引っ張り出しす。ユーノがわかりましたと返

事をしたのを背中を確認して下の階のシャワー室に向かった。

そんな……信じられないとユーノが呟いていたけど誰も聞いていなかった。

「あっアー君、おはよう」

ぼくが部屋に戻ってきた時すでになのは起きていてはユーノと何かを話していたらしい。昨日途中で寝てしまい聞いていなかった話を聞いているのだろう。まだ寝むそうだが僕にあいさつできる程度には覚醒している。

「うん、それで何を話していたんだ？昨日の続きか？」

「そうだよ、わたし途中で寝ちゃったし、ユーノ君がしたい検査があるって言ったから」

「検査？なんだそりゃ？」

ユーノに目を向ける。

「ふたりの魔力測定をする検査です。あまり厳密な方法ではありませんがとりあえずの目安にはなるかなって。ぼくが思いだしたときにはアーリンはいなかったし、ちょうどなのはが起きたので」

「にやはは……わたしはともかくアー君はとっても強そうだね、きのうの大きいのだって一撃だったし」

「それに、アーリンにはわからないことがあります。昨日のジュエルシールドがどうなってしまったのか……」

「そんなこといわれても……」

きのうの夜から肌身離さず持っている銀色のクロスに目を落とすと呼びかける。

「アルバス、バリアジャケットを」

《OK、マスター》

部屋が蒼を伴った白銀の光に染め上げられる。

そこには純白のバリアジャケットとその中を『青い模様』が動い



てる。いや、蠢いてると言ったほうがいいかもしれない。

「ほんとに不思議だねー、なんだか生き物みたいに動いてるし……ちよつと癒されるかも？」

「これってきのうのジューエルシードを取り込んだってことになるの、ユーノ？」

ユーノは顔をゆっくりと振る。

「すみませんがぼくには見当もつきません、もっと専門の知識のある人ならわかるかもしれません」

「気にしないで、わからないことがあるのはぼくも同じだから」  
そういつてユーノに伝えてからきのうの記憶をたどっていった……

「なっなんなの、これ!？」

今日の夕方に偶然出会った少女にぼくの持っていたデバイスを託して、起動した。

(まさかこんなバカ魔力だなんて!!！)

あたり一面が桜色に染め上げられるほどの魔力。それはもう力の荒波とっていい程だった。

(でもこの子は戦いじゃあまるで素人!まだ、どうなるか分からない!!！)

さっきまで逃げていた様子をうかがうと、戦闘経験が豊富とはいえなくともかまわないから、せめて運動神経の良さを願った

もののだめだった。あの女の子が来ていなかったらもう二人で完全にやられてしまっていただろう。

「ユ、ユーノ君、次は?……次はどうするの!？」

「思い浮かべて、強い自分の姿を、心の中で思い浮かべるんだ!!」  
えっとー、えっとーと少女が困惑している。急いで!!もうすぐ

そこに……

化け物の目玉のような穴がぎよろりと動く。瞬間息の詰まる冷気が体を駆け巡った気が来た。

「もう、これで決定！どうにかなって、お願い！！！」

《OK, Rising Heart set up！！》

デバイスの無機質な機械音声が告げられる

少女が桜色に光に包まれる。が一瞬で光ははじけて再び姿を見せる、純白のバリアジャケットをまといながら。

「これって……」

「よかった！やっぱり才能はあったんだ！！」

でも喜んでいられる時間はなかった。死神の大がまみたいな真っ黒いカギヅメが彼女に振り下ろされる

「！？」

《protection field》

桜色の障壁が展開されカギヅメが受け止められる。

（堅い……これならもうしばらく持つてくれる）

「ユーノ君、次は！？」

「今展開している障壁のほかに攻撃の魔法があるはずなんだ！それをどうにかしてあれにぶつけて！！」

「そんな……いまこれだけ……でも……きついんだけど」

そう言っている間にも障壁にひびが広がっていく……万事休すか

……

「もう限界……」

桜色の障壁は砕かれ、少女と化け物の空間が埋まる。大がまが振り下ろされる。目玉のような穴がゆがんだように見えた。

「オラアーーッ！！！」

突如、一瞬で化け物は『凍って』カギヅメの動きが止まり、そのまま砕かれた……

木っ端みじんになった化け物の残骸の先に先ほど別れたもう一人の少女の姿があった。

「今のって……アー君なの？」

「そうみたいだね……」

無事でよかった、と言ってくる少女、彼女も純白のバリアジャケットと剣型のデバイスなのだがスカートではなくズボンをはいていた、一つ奇妙なことをユーノは気付いた。

（あの子……大きな魔力を持つていないのか、反応が薄い。でもさっきの攻撃の威力は本物だった。何かのレアスキル持ちなのか）

「あの、ユーノ君？何か光ってるよ？」

「ホントだ？なんだろう、あれ？」

化け物の残骸がどことも想像しないうちに消え失せ代わりに青く輝く宝石のようなものがひとりでに浮かんでいる。

「あれがこの事件の発端『ジュエルシード』っていうロストログアだ。どこかに消えちゃわないうちに封印しておかなきゃいけない。なのは」

「でもわたし封印のやり方なんて知らないよ」

「大丈夫、細かいことはデバイスがやってくれるから念じるだけでいいはずだよ」

わかったとうなずいてなのはは封印を念じる。レイジングハートから淡い光が生まれジュエルシードに向かうのだが……

《refused》

「あれ……？なんか、封印できないっぽいよ？」

「そんな！？活動中はともかく、機能は一時的に停止しているはず……」

どうして……とユーノが考える前にジュエルシードの光が増し先ほどの危機を救った少女に向かって飛んでいった。

「うっ！」

「アー君！？」

「大丈夫ですか！？」

頭を守るようとつさに組んだ腕を下ろしながら絞り出すように答えた。

「大丈夫……いきなりで驚いただけだから」

ふう、とため息をついて安心するのは。しかしユーノは安心する前にある変化に気付いた。

「あの、もしかしてその腕に付いた青い模様って『ジュエルシード』？」

「えっ？何をいきなり……」

《completed number, 17》

デバイスから無機質な男性音声が発せられる。その意味することは明白だった。

「いきなり、一体なんなんだアルバス！」

《わかりません、マスター。私の機能が勝手に作動したしかお答えできません》

「そんなこと言われたって納得できるか！？答える！！」

《申し訳ありません。これは私自身、知らないことです。ご容赦を》

「あのー、アー君？そのことはとりあえず後回しにして聞いてほしいことがあるんだけど……」

なのはが恐る恐るといった口調で話しかけた。さっきから『アー君』って呼んでるけどまさかあっちの子は男の子！？

まさかね……とユーノが考えているうちに、デバイスに向けられていた顔がなのはに向かう。

「実は、さっきまで頭から離れちゃっていたんだけど、わたし結構いろいろやかしちゃって、その、なんていうのか……」

なのはに注意されて少女があたりを見回す、するとあたり一面に破壊の傷跡が生々しく残っていた。折れかかっている電柱に、ひびが入って地面が覗けるアスファルトに崩壊したコンクリートの壁。

隣人ともっと仲良くできるようになるだろう、近年ささやかれる近所関係の弱まりを、きつと。

訴訟問題にならなければ……

ユーノは、あれだけの魔力だったんだ無理はないと妙に冷静だったのだが二人の少女は顔を見合わせる。

「これは……まずいな」

「だよな……さすがにお説教だけじゃ済まないよね……？」

二人とも顔が青くなっている。じゃあやることは1つだよね……とお互いにうなずきあって足元にいたユーノを拾い上げる。

ふたりは同時に駆け出した、もとい、逃げだした。

「とりあえず、ごめんなさい……！！！！」

謝罪の言葉は傷だらけになった通学路に吸い込まれていった……

「で、結局どうなるのこれ？」

きのうの戦闘終了後から何も起きてはいないが『ジュエルシード』と呼ばれる危険物を持ち歩く感覚はコートの中に時限爆弾を持ち合わせているようなものだった。

「取り出す方法がわからないうちはできるだけバリアジャケットを装備しないでそのままがいいと思います。いくらなんでも扱いがわからない危険なものは放っておくしかないですし……」

「でも正直こんなもの抱えたまま日常生活を送るのはキツイんだけど……アルバス、どうにかならない？」

左手に持っている通常のクロスに問いかける。

《はい、マスター。私には取り出す方法はわかりませんが、確実に安全であると解ります》

「なんじゃそりゃ……、相変わらず理由はわからないのか？」

《すみません、今の状態は極めて安定で普通に封印をかけるよりも良い状態ではあるのですが……》

アーリンがさらに何かを言おうとしたがユーノが止める。

「まあまあ、これ以上はきつと何もわからないでしょうし、あとで考えましょう。それよりなのはの検査結果が出ました」

「へー、どうだったのユーノ君？」

ユーノのもとに光が集まり一枚の紙のようになった。

「半ば想像通りだけどあらためて見るとやっぱり凄いな……検査結

果は『A A +』」

「『A A +』？すごいのかな、それって？」

なのはの魔力についてユーノが説明しているのをアーリンはほとんど聞かず、一年ほど前高町家に拾われたころを思い出す。

（やつぱり、一年前に拾われる以前のことと何か関係があるとしたか考えられないかな？今はアルバスの記憶もすっ飛んでいるしぼくの記憶もない。記憶と一緒に重要なことも忘れた……一体何が？）

自分の知らない自分。今回の出来事の発端は確実に『ソイツ』のせいだろう。

昨夜見た夢ももしかしたら……。自分の『内側』にもう一つ的人格があることを想像するだけで背筋に冷たいものを感じる。いつか、もしかしたら自分が盗られてしまうような気がして恐怖と戦慄を覚える。かぶりを振ってこの考えを頭から締め出す。

（今から考えてもしようがないさ……そういうことにしよう）

「そんな説明は後回しでなのは、シャワー浴びて来な？学校とか汚れたままじゃあまずいだろ？」

「うーん、やつぱり？ユーノ君がわたしが起きてすぐに検査しちやっただからすっかり忘れてたよ……」

ユーノの説明をまじめに聞いていたみたいだしけっこう今回の騒動にも戸惑っていないようだ。こういう芯の強さが彼女のいいところなのかもしれない。

「じゃあ行ってくるよ、そうだ！シャワー浴びたらこっちの部屋で寝ていい？」

「自分の部屋があるじゃないか……そっちでいいじゃん」

いきなりとんでもないことを言い出す。

「だってこっちの部屋のほうがポカポカしていて気持ちいいよ？布団もあつたかいし」

「だめです。自分の部屋にきなさい」

ぶー、けちいーと文句をたれながら部屋のドアを閉めたら少ししてまたドアの開く音がする。なのはの部屋は食卓と同じようにア

ーリンとちょうど反対だ。

どっちが年上かわからないですねとユーノが呟くが、アーリンは顔をゆがめる。

「じゃあこれからぼくは朝食作りも手伝うのとついでにパンか何かとつてくるからここで待っていて？」

「わざわざすみません」

「別にかまわないけど敬語をやめてほしいかな、そういうのってなんだか苦手なんだ」

「わかった。そうするけど君の検査はいつからやることにしようか？できれば少し時間をもらって詳しい検査をしたい。なんでバリアジャケットが『ジュエルシード』をのみ込んだのか、君自身の能力についてなんだけど……」

「じゃあぼくが学校から帰ってきたらでいいか？今からはもう手伝いをするから時間の余裕がないんだ」

わかったとユーノが返事をしてうなずいたのを確認してバリアジャケットをしまいドアを開けて部屋から抜け出した。

「そうだ……どこであのデバイスを手に入れたのか聞いてないや。まあ後になってからゆっくり聞けばいいか……」

ユーノはそう言うってから目を閉じる。気になったことが多くてきのうはうまく寝れなかったから睡眠不足ですぐにまた寝れそうだ。それからまもなくアーリンが来てパンを置いていったのだがユーノは気付かなかった。

それからいつもの朝と同じように朝食を食べ、2人は学校のバスに乗る。

何も変わらなかった朝食が変わったのは2人だけだった。

## 変化と覚醒（後書き）

今回は戦闘シーンかと思いきやの構成です。しかも長いし下手だし

……

次はなのはVSアーリンの模擬選にしようかな……



## 兆し（前書き）

更新遅れてすみません。

今後もこんな感じだと思うので気長につきやってください。

あと、簡単でもいいので感想がほしいです。どなたかやる気があつたらよろしくお願いします。

## 兆し

今日のクラスでは朝からあの通学路の凄惨な状況でもちきりだった。「だからよー、おれが起きた時には父さんも母さんもいなかったから外に行つてたら通学路がめっちゃめっちゃになつていてよー、2人ともそれを見に外に行つていたんだぜ息子を放つておいてな」

先ほどからマサが今朝の事態に熱弁をふるっている。当事者として気が気でいられないアーリンだったが今日はきのうの約束通りマサ立ちとお昼を食べている。なのはたちはすでに屋上に向かった。朝のうちに口が滑らないように注意しておいたがやっぱり心配だ、もしばれたりしたらアリサのコウゲキに耐えられるか……

「おれの意見じゃあ、今回の事件の犯人はどつかにいるトチ狂った殺人鬼やテロリストじゃない、もつと超能力的なものを持った奴らだ。殺人鬼が人を殺さないわけないしテロリストにしても誰も見ていないときに『花火』を上げたつてしょうもないだろ？だから、答えは超能力者が町をぶっ壊したんだ……大体こんな感じだろ、な、アーリン？」

（どうしようか、今朝ユーノに教わった念話つてやつで確認してみるか……）

「おい」

（試してみるか、ユーノとは通じたけどなのはに繋がるかはやってみないことには……）

パーンッ！！

「痛！！なにすんだよ！？」

「やつと帰つてきたか、お帰り。お前今までずっと上の空でおれの話聞いてなかっただろ？」

マサがどこから取り出したハリセンをしまいながらいった。アリサといいこいつといい一体どこからハリセンを出す？

「わかったからハリセンはやめろ。今ので脳細胞が一体いくつ死ん

だことやら……」

「本当だな？おれの意見は、かくかくしかじか」

（なるほど…… 本当に直感だけに頼ってここまで解ったんだから、相変わらずこいつはすごい）

「でどうよおれの推理は…… いい線いつてるだろ？」

「確かに言いたいことはよくわかったけど、超能力者が通学路を壊した理由がわからない。意味もなく壊す理由がないのは『超能力者』だって同じだ」

マサは眉間にしわを寄せて唸って何かいい案がないのかと考察しているのだろ。少し経って唸るのをやめた。

「宝物でも集めてるんじゃない？だいたいこういうバトルモノはそういうのが『お約束』ってやつだし…… 何の事だかわからないけど」（こいつの将来は大物だな、間違いない）

直感だけでジュエルシードの存在を感じ取ったマサの感性は犬の嗅覚にも引けを取らないだろう。

「仮に超能力者がいたとしてもそいつらはなぜ通学路を壊した？壊れたままじゃあ、おまえみたいに直感のいいやつに捕まってしまう恐れがあるからおれなら絶対に直してからその場を離れる」

今度は眉間にしわを寄せずにゆっくりと目を閉じて考えるというか瞑想しているというかそんな表情をしていた。

「それもそうだな…… 納得はできないがこれ以上はどうしても証拠が足りないしそういうことにしておこう」

その後も数分間、アーリンは特に危ない話題も踏まずにマサたちとの昼ご飯を食べることができた……

放課後。アーリンはユーノの検査を受けていた。今朝と同じアーリンの部屋だが、なのはは例によって塾があり帰宅してないため男二人だけだった。2人ともベッドの上に腰かけている。

「すこしだけなのはと魔力の質というか、形というかそんなものが違うかな……それに一般的な魔力よりもなんか『冷たい』ような感覚があつて。言葉だと難しいな……」

「つまり、レアスキルつてやつか？学校でいつていた？」

いまは魔力を測定する段階で全身から光が滲んで、ホタルみたいに発光していた。

「それはもう少し後の検査でわかると思うけど……でた、推定魔力は平均ぐらい」

「平均つて……」

「まあまあ、もとはなのはが強すぎただけでこれくらいでも十分強いほうだよ……次にレアスキルだけど、特に何もないね」

「そうか……ケツコー一般人なんだな、ぼくつて……」

アーリンが複雑そうな口調でつぶやく。

「でもまだアルバスの機能とか解らないこともあるし、そっちのほうで何かあるかもしれないよ？」

今朝、偶然にもアーリンのプライベートな部分を聞いてしまったユーノには検査で何もわからなかったから落胆でもしているのではないかとあわてて言葉をつなぐ。

そうだね、といったきりアーリンは口を閉ざし、ユーノには何も言えなかった。2人の間に沈黙が流れる。

「まあ、気にしてもしょうもないか……そういえばユーノ、お前昼ご飯はどうした？まさか食べてないとか？」

「大丈夫。この体は小さいから燃費性能もいいから朝のパンだけで十分だったし」

「ならいいんだけど……」と言いながら時計に目を向ける。午後5時十分前だった。

「やばい、5時から恭也と練習試合があつたんだよ!？」

悪いユーノと口で断わつてあわてていつものジャージに着替える。

「後のことはまた夜に、その時にはなのはも帰ってきてると思うし、じゃあ!……」

そのままアーリンは家の裏にある道場に向かって駆け出した。

「遅かったな」

アーリンが道場に付くと恭也はすでに準備完了の様子で静かに座禅を組んでいた。

「悪い、直前まで忘れていたから……」

全くだらしないやつだ、と言わんばかりにため息をつく。

「恭ちゃんだつてついさつきまで忘れていたじゃない。わたしが思い出さなかったら……」

「余分なことは言わないでいい。それよりさつさと準備しろ、この間の結果はまぐれだったと言っことを証明してやる」

ハイハイと返ししながら愛用の木刀を手取る。走ってきたから体は暖まっていたが、腕の関節をほぐすようにストレッチし最後に軽く深呼吸。肺の中の酸素が入れ替わり頭の中から余分な思考が消え戦闘に特化した状態になったのを確認し、審判の美由紀に声をかける。

「よし！これより恭ちゃん対アー君の練習試合を始めます。両者、礼！」

恭也とアーリンが道場の中心で向かい合い礼を交わす。

互いに3歩離れ、エモノを構える。

恭也はこの家に伝わる伝統的な『小太刀二刀流』木刀を正面に突き出すよう構えるというシンプルな構えだ。

それに対して、アーリンは身の丈ほどもある大太刀の木刀を抱えるようにして正面に構える。

「では……、試合開始！」

開始の号令とともにアーリンが疾風のように恭也に向かって駆け出し上段から大立ちを振り下ろす。恭也は右の小太刀でアーリンの大太刀を受け流し、左の小太刀で神速の突きを繰り出す。

「ハアッ！！」

小学生相手に大人げない……といわれかねない気合の一閃、小太刀の先から空間が割れんばかりの威力があった。しかし、アーリンは身をひねってかわしそのまま勢いを保ちながら姿勢を低くする。腰と足にわずかにタメを作り、下段から振り上げるように解き放つ。  
「オラア！」

木刀を交差させてしのいだが、恭也はバックステップでそのまま距離をとった。アーリンはさらに距離を詰める。腰ごと大太刀をひねって先ほどよりも大きいタメを作り、突きを繰り出す。恭也はその衝撃と威力を受け流し、冷静に処理し隙だらけだったアーリンの腹部を柄でえぐるように攻撃する。

「ハア！」

「！？！？」

そのまま腹部に打ち込まれて終了かに見えていたが、アーリンは空中で前転するようにしてかわしそのまま距離をとった。

2人の間でいくらか剣劇は続けられたのだがなかなか決着はつかなかった。やがて、審判の美由紀の合図でこの結果は持ち越しになった。

「試合終了！もう規定の15分は過ぎちゃったから両者引分けということで」

アーリンは道場の床に大の字になって寝っ転んだ。

「くっそー！！あと少して勝てたかもしれないのにー」

「今回はおれだって冷静さ。そう簡単にはやられないし、まだお前には無駄な動きが多いからな」

悔しそうに「ううー」と唸る。

「まあ、アー君もあの恭ちゃん相手にここまでやれるようになったんだからすごいよ？まだ一年ぐらいしか経ってないのに」

美由紀がアーリンを励ますように言った後、ここにいないはずの4人の声が聞こえた。

「恭也はだいたい冷静にさばけるようになったみたいだし、アーリン

は無駄な動きや剣筋を鍛えればもつと強くなれるだろうね……2人とも、強くなってきたなあ」

「やっぱり、アー君にはセンスがあるのかな？わたしはあんなに飛んだり跳ねたり絶対できないよ」

「むしろ、あんなに跳ねたりしてるのに目が回ったり体力がつきないほうが驚異的じゃない？もちろんそれで戦うのも同じぐらい驚異的ね」

「そうだね……さすがにあれ（吸血鬼の私でも）は真似できないだろうしね」

「なんで士郎はともかくなのはとアリサとすずかがいるんだ？塾があるんじゃないの？」

士郎にしても翠屋があるはずだし、お店を無人にしてもいいのだろうか。

アーリンが立ち上がって4人のほうに向きなおる。

「翠屋は桃子に代わってもらって休憩を兼ねて見に来たんだよ。なのは達はすこし早く塾が終わったようだけどね」

「にはは……で、アリサちゃん達は塾でユーノ君の話題になって打ちにいるよって言ったらお見舞いに行くって言い出したからついてきて、お店にいたお母さんがアー君が試合してるっていったから見に来たの」

「今朝のわけのわからない事故であの子を預けた動物病院が崩壊して逃げてきたらしいのね……」

「崩壊ってアリサちゃん、壁が少し壊れちゃっただけなんだから……でも不思議だよな？あの動物病院からなのはちゃん達の家って一番遠いの逃げてくるし。距離的にはウチやアリサちゃんの家のほうが近いのにね」

なのはが引きつった笑顔を作った。

「あいつならばくの部屋にいるからなのはに案内してもらってくれ。ぼくは道場の片付けとシャワーを浴びてからそっちに行くから」

わかってるけど、早くしなさいよ、アリサが言ったのを耳にして

アーリンは道場の片付けに入り、3人の影は夕日の中で家のほうに消えていった。

先に道場の後片付けを開始していた2人に交じってアーリンもモップを持つ。長年の稽古でつやつやになった木の床の上を乾拭きで黙々とふきあげるだけなのだが、けっこうな広さがあるので何度も往復しなければならぬ。試合のあった場所だけで十分な気もするのだが昔から稽古が終わるごとに道場の全面を掃除していたらしく、今でもその伝統を守っている。というのを美由紀から聞いた。

「よし、これで終了!!」

最後に参加したアーリンが最後の列を拭き終わりモップを片づける。

「やっぱり3人だとういうのは早いねー。恭ちゃんと二人だけの時とかはさすがに広すぎだったしね」

審判役だけの美由紀がしみじみと言った。

「父さんは参加できないことが多かったし、こう考えると確かに役には立ってるなアーリンは」

「またそんなこと言って!。それより、アー君は早くシャワー浴びてなのはの達のところに行かなくちゃ。後の戸締りはわたしたちだけでも十分だし」

わかった、そうするとだけ答えてアーリンは家に戻る。後ろから何か会話が聞こえてきたがほとんど聞こえなかった。

「アー君が家族になってなのはと同じくらい喜んでたじゃない? 男兄弟ができるって」

「そんなこと言った覚えはないぞ!」

「すぐくはしゃいでいたじゃない? 今日だってリベンジしたくらいだし、結構気に入ってるんでしょ……」

「別にそういうつもりじゃあなくてあれば、兄貴としての威厳の問題で……」



その日は結局、ふたりは遊びに来て、今度の休日にまたユーノを交えて遊ぶことを約束して帰って行った。高町家の人にはその時ユーノのことがばれてしまったが返事二つで承諾した。2人できちんと面倒をみるという条件付きだった。

その日はそれで終了した。アーリンが風呂に入ろうとしたとき、なのはと一緒に入ろうと言い出し恭也に半殺しにされかけたのは、また別の話。

翌日、ユーノが張った探査魔法にジュエルシードの反応が出たので現場に急行。そこで巨大になった子犬を発見し、これを撃退。前回に比べあっけなく終了したのは、二人が一通りの知識を覚えてのに加えごり押しの攻撃が功を奏したからであり、アーリンはともかくなのはと2人のコンビネーションはまだまだとユーノにだめ押しした。そこでふたりの魔法の訓練をすることが挙げられたのだが……。

「訓練するのは仕方がないとして、こっちのほうはどうしよう？」  
アーリンは自分のバリアジャケットを見つめる。ふたつになった蠢く青い模様があつた。

その後、話す暇もなくアーリンとなのはは「昼休みが終わっちゃう」と叫びながら小学校に飛んで行った。

ユーノは1人で家に帰って行った。

昨夜から来た世界「地球」魔法の文化がないのには驚いたけどそれ以外は衛生的で安心して眠れるいいところだった。きのうは丸1日分移動に時間を使ってしまい何もできなかったが、今日からちゃんとお母さんの『探し物』を探さないといけなかったのに、目的地に向かう二つの反応を発見した。

（この世界には管理局はおるか魔導士もいないはずなのになんだらうこの反応は？）

わたしと使い魔のオオカミの姿をしたアルフは先回りをして認知障害の魔法をかける。近すぎると2人にばれてしまうかもしれないので一定の距離を離れ、2人を待っていたが途中でで使い魔らしい動物と合流してちょうど巨大化し切って暴走を始めた子犬と戦闘開始した。

「ふうん……ひとりは魔力が強そうだけど、もう一人は大したことないね。2人ともフェイトの敵じゃないよ」

「そうかもしれないけど、油断は禁物だよ？茶髪の子まだ本気を出していないだけかもしれないし」

黒髪の子が強大化した子犬に接近し、ひと太刀を決める。ひるんだのだろうか、一瞬動きが止まりすかさずもう一人が砲撃で子犬の頭を打ちぬいた。非殺傷設定のおかげで子犬は無傷でそばにいた飼い主の人とともに気絶した。

「今がチャンスだね、このままあれをいただいちゃおう」

子犬の体から青い光が漏れてお母さんの『探し物』が現れる。わたしたちも彼女たちも同じものを集めている以上、いつかは敵対して『探し物』を奪い合うことになる。だったら、早いうちからこちらに流れを引き寄せて素早く回収しきってしまうのが一番だろう、あの子がまだ未熟なうちに……

「そうだね、あっちがまだ気付いていないうちに……」

認知障害の魔法を解除していつきに『探し物』を回収しようとした瞬間、その信じがたい情景が目には張り付いた。

強い光を放ち目を一瞬逸らしたただだったのに。わたしがこの町に張っている『探し物』のための探知魔法は完ぺきだった、なのにすっかり消えてしまった。探知魔法からも視覚からも。

「なっ、一体これはどういうことだい！？あたしの魔法からも目からも一瞬であれを消しまうなんてありえない……」

アルフも驚いている。当然だ、わたしよりも補助系の魔法は上手

なようにわたしが作った使い魔なんだから。でも、そうするとあれはどこに？なにか特殊な空間転移の魔法でも使ったのか？でもよほどのものでない限りお母さんが作ってくれたあの魔法が追跡できないわけがないはず……

「くそっ！！どうするフェイト？あの連中にあれをどこにやったかぶちのめして聞き出すかい？」

「いや、ちよつとまってあの黒髪の子のバリアジャケット、青い模様が一つ増えてるように見えない？」

いまにも襲いかかりそうなアルフを抑える。

「そう言われてみれば……でも一体？まさか、あれを取り込んだのか？バリアジャケットが？そんなことができるのかい！？」

「わからないけど、もしかしたら茶髪の子よりもあの黒髪の子のほうをマークしないといけないかもしれないね」

向こうの話も終わったのだろう。2人がバリアジャケットのままどこかに飛んでいって、使い魔と別れた。

「わたしたちはこのままあの二人も追いかけて今のあれを取り返すかい？」

「いや、今日は別のものを探しに行こう。先に集められるだけ集めて後から取り戻せばいいしあの黒髪の子の能力もよくわからない以て下手な手は打てないし、まだそんな無茶をして集める段階じゃないよ」

解ったとうなずいて、アルフがわたしの後に付いてくる。さあ、早く集めちゃおう、お母さんの探し物を……

金色の髪の少女とオオカミは寄り添って近くにあった森の中に消えた。

## 兆し（後書き）

初めにも書いたんですが感想を、お願いします。マジで。

## ファースト・コンタクト（前書き）

今回はものすごく遅れてしまってますみません。  
次回からはコツコツやって行きます。

## ファースト・コンタクト

休日。2人ですずかの家に来ていた。

視界いっぱい広がる城壁のような門と壁、アーリンが以前に怪獣みたいだと洩らしていたがなのはあまり伝わっていないようだった。門に備え付けられているインターホンを押して来訪を告げる。怪獣の目がぎょろりと動いて2人をとらえる。

すでに2人のことが伝わっていたおかげですぐにメイドさんが門を開けてくれた。

「お待ちしておりました。なのは様、アーリン様、すでにアリサお嬢様はお着きになっています」

「こんにちは、ノエルさん。わたしたちが最後なんですよね？」

「そうみたいだね、でも四人しかいないから遅刻とかは気にしてなかったけど……」

ノエルに案内されて2人は離れた本邸に向かう。広大なのに手入れが行き届いている庭園の道を抜けて数分間歩き続けてようやく目的地の本邸に着いた。怪獣の胃袋だろうか。さらに進んですずか、アリサのいる裏庭に着いた。

「ヤッホー2人とも、久しぶりだね？」

「遅かったじゃない？ちゃんとその子も連れてきてくれたようで安心したわ」

2人の座っている机にはすでに紅茶とクッキーが用意されていた。「こいつが家を出る前に消えて探してたんだ」で

アーリンがわきのかごを持ち上げた。中にはユーノが入ってる。

「（悪い、ユーノ。今日1日がんばってくれ）」

「（わかってるよ。今回はしょうがないしね……）」

「（ごめんね、わたしが少し寝坊しちゃったから）」

3人が念話で会話していると、

「じゃあ2人とも座って？今日はアリサちゃんが手作りクッキーを

作ってくれたから」

なのはとアーリンが驚いてアリサに目を向ける。

「べ、別にやってみようかなって思っただけで、他意はないんだから……」

ぷいっと、そっぽを向く。

「じゃあ、ひとつもらおうか……」

「いったきまーす！」

さまざまな形に焼かれたクッキーのうちの一つを口に放り込む。サクサクな舌触りとバターとミルクのほのかな甘みが口に広がった。

「うん、うまいんじゃないか」

思った感じをそのまま口にした。

「いい感じだと思うけど、少しパサついてるかな？」

喫茶店が実家の少女の評価は辛口だった。

到着してからしばらくの間、アーリンは会話の輪に加わっていたのだがさすがにもう話すことは憂鬱だなと思って適当な理由をつけて1人で裏手の森に散歩に来た。

「女子っていうのはいつまでも話してるだけで満足できるんだからな……」

誰ともつかない独り言がこぼれる。

ユーノも誘おうかと思ったが、他の猫に追われて（遊ばれたただけだが）ぐったりしていた。

まあ、楽しそうだったからいいか。

しばらく森の中をひとりで歩く。暖かな日の光とさわやかな風が心地いい。

「やっぱり、こういうのはいいな……」

どこかに座って昼寝でもしようかと思ったらアルバスに反応があ

った。

《申し訳ないのですが、マスター。魔力反応が近くに一つあります。どうされますか？》

「ほんと？せっかく休んでたのに……まあ、なのは達も気付くだろうし、ぼくたちだけでとりあえず行ってみよう」

《了解しました》

目が覚めるような蒼いバリアジャケットを纏う。

「じゃあ、どっちにいけばいいのかな？」

「反応は……こっちでいいんだよね、アルフ？」

「おうさ、間違いないよ、フェイト」

わたしたちは今どこかのお金持ちが持っている大きな屋敷の裏にある森に來ている。探し物の反応は森の中から。空から結界を張ってこちらの姿を見えなくして探しているのだけど細かい部分は結界を解いて地上で実際に調べないといけない。

「今回からはあの子たちとも遭遇する可能性が高いし、さっさと見つけなくちゃ」

できるだけ目立つようなまねはしたくない。

あの子たちが管理局の人間なら遭遇でもしたらこちらが一気に不利になる。できるだけ早く、多く、確実に。

そう、お母さんのためにも、わたしが頑張らなくっちゃ！！

「でかいな……」

《そうですね……。これはこの世界の原住生物なのですか？》

「まあ、ね。こんなに大きいのはなじめてなんだけど」

強大な牙は、獲物の肉を食いちぎるため。命を潰えさせ自らの糧



にするべく進化したものの。

強大な爪は、獲物を逃がさないため。大地を駆け、獲物に食いこみ逃がさないためのもの。

つぶらな瞳は見る者の心を癒し、ふわふわの体毛はマシユマロのように柔らかそうだ。

そこにいたのは巨大化した子猫だった。

「ぼくが知る限り、猫の巨大化に成功したニュースも新種の巨大猫が発見されたとも聞いてないから、やっぱりジュエルシードの影響？」

《でしょうね。ジュエルシードの魔力を利用してあそこまで巨大化することは理論上十分可能です》

「どんな原理なのか気になるけど……とりあえず攻撃する？」

《いいえ。マスターはお二人が来るまではなにもされないのが一番よろしいと思います。マスターに万が一があつたらあの動物よりも厄介なことになりかねません》

「やっぱりそういうと思った。僕じゃ危ないからって止めなさいって」

一度息を吸って、しっかり吐く。

《申し訳ありません》

しばらくだまって猫を観察する。毛繕いをするもの本の性格がおとなしいせいかわかりず、その場で昼寝をしているだけだった。一番驚いてるのは猫のはずなのに、一番どうでもよさそうなのも猫だった。

「このままじゃあ、何事もなく終わるね……なのはがちょっと遅いの気になるけど」

それまで黙っていたアルバスのこえがあがった。

《マスター、魔力反応が……》

アーリンは振り返る。普段通りのはずだったが、どこことなく遅い感覚があった。

《ですがこれはお二人のうちどちらでもありません……》  
黒衣のB Jを纏い、手に持った武器を振り上げている。  
刃は、猛禽を思わせる鋭い爪のような三日月形。

《……全く未知の反応です》

あまりに突然現れた猛禽の少女は、美しかった。

新雪の白さを持った肌。

宝石を思わせる赤い瞳。

そして、風を受けて広がる金糸の髪。

ああ、こんなときでなければ、きっと見とれていただろうに。

やがて、彼女が持つ三日月が、

アーリンに向かって真直ぐ、

堕ちた。

「あれだ」

私は今回の目標を発見した。すでに子ネコに取り付いて巨大化している姿を上空から確認できた。

そのそばにあの子も発見した。

「やっぱりいた。」

先日と違って青いB Jの子は一人で猫のそばに立ちつくしているようだった。

「行くよ、アルフ。まずは先制攻撃」

もうひとりの白い子はまだ見当たらないが合流されたらこちらが不利になってしまう。二人になる前に片一方は戦闘不能にしないとけない。

「わかった。フェイトの敵じゃないと思うけど、一応気をつけてね？」

「わかつてる。バルディツシュ」

《Yes, Sir》

一気に加速してあの子の後ろに飛び込む。

私とその背中に斬撃を加えようとした時、振り返ってこちらを見た。顔が驚愕に染まっていた。

『ごめんね……』と心の中で呟いて。そのままバルディツシュで切りつける。

ギインー！

だが、肉がつぶれる感覚と音がなかった。

「危ないな……いきなり後ろからなんて。君はこの誰？」

いつも間にか青い子の手には同じ色の剣が握られていて、私の完全なはずの奇襲を受け止めていた。

「ウソ……」

この子は直前まで私の接近に気がつかなかったはず。

ではなぜ、私の奇襲は成功しなかったのか……？

「こっちの質問には、しっかり、きっかり答えてもらうよ！」

こちらが自問自答している隙に左足のけりを放ってきた。それを後ろに飛んでかわす。

『グダグダ言つてられない。ここからは、正面切つての一騎打ちで！――』

着地してすぐに前に踏み込んで今度は切り上げる。

だがあの子も相応に腕が立つのだろう。紙一重でかわし、剣で私の顔めがけて突いてくる。

「！？」

私も紙一重で突きをかわす。

『この子は相当接近戦が得意のよう。なら少し離れて攻撃すれば……』

かわした勢いのまま一気に後ろに距離をとる。が、  
「ハアッ！」

私が後ろに下がったところに、さらにもう一回剣で突いて青い魔

力光の斬撃を飛ばしてきた。カミソリのような鋭さがあった。

「クッ」

また私は紙一重でそれをかわす。そのまま、さらに距離をとる。  
「あれもかわすか。結構すばしい」

10mほど距離ができたが、まだ油断はできない。あちらには、まだ隠し玉があるような気がする。

「……あなたの持っているジュエルシードを渡してください。そうすれば危害は加えません」

「いきなり襲ってきた君がそんなことをいうの？というよりも、僕はこれについてはよくわかんないし、いきなりよこせって言われても困るというか……」

ウソはついていそうにない顔だったがそれでは意味がない。私は、全てのジュエルシードを一刻も早く集めなくてはならないのだ。

お母さんのためにも、早く。あの優しかったお母さんに会うために……

「それなら、力ずくで奪います……!!」

私は左手をかざして魔方陣を呼び出す。自動追尾の性質をもった魔法を使うためのものに魔力を込めていくつか魔法を蜂起させる。

《Fire》

魔法が流れるように一気に襲いかかっていった。

「問答無用ってわけか!」

左に飛んでかわそうとするが魔法が獲物のあの子を追いかけて左に折れる。

「自動追尾って、そんなものもあるの……?!」

今度は上に飛んぶ。魔法もそれに合わせて上に飛ぶが青い子は自分に直撃する寸前にその魔法を切りつけた。

その時、魔法はまるで凍ってしまったかのようにあの子の魔力に包まれ、砕けて、散った。

『今だ!』

気を取られている一瞬の隙を突いて今度は攻撃力、弾速がともに

高い魔法であの子を狙う。

《Fire》

打ち出された魔法は先ほどとは比較にならない破壊力を伴って獲物に喰らい付いていった。

『今度こそ……、あの子を戦闘不能にできるはず!』

だが、猟犬が獲物に食いつく瞬間、上空からの桜色の砲撃が、私の魔法に直撃してかき消された。

「アー君!」

この間確認したあの白い子だった。

「なのは!? ナイスタイミング! このまま、ジュエルシードのほうを任せた!」

なのはという子がそのまま空から巨大化した猫のジュエルシードを回収するのだろう。

「そうは、させない!」

今度はなのはという子に向けて魔法を放とうとするが、やはり青い子がこちらに向かって切り込んでくる。

「なのはには、指一本触れさせない!」

魔方阵を消して斬撃を受けとめる。

『さすがに二人分を相手にするのは無理。退かなきゃ』

剣の力を受け流し相手の姿勢を崩す。そこから回って柄で背中を攻撃するが剣で受け止められる。が、そのまま距離をとる。

「逃がすか!」

先ほどと同じように魔法を放ってきたが、そこまで長い射程ではないらしくすぐに距離を稼げた。

『次回からはもっと注意してかからないと……』

毎回このように邪魔されてはいつまでたってもジュエルシードは集まらない。

そうなってしまうば、お母さんも戻らない。帰ってこない。

『そんなの、嫌、だもんね……』

私はそのまま戦域を離れていった。

「逃げられた」

なのはが現れてすぐに撤退したが、あの子もジュエルシードを集めるならまたどこかで戦うことになるだろう、けど……

「あの子はどうして？」

危険物であるはずのジュエルシードを集める？

もしも以前ユーノが言っていた管理局というものならあんな強引なこととはしないはず。法にそむくのは、こちらなのだから堂々と所属なり何なりを名乗って合法的に取り上げればいい。そうしないってことは、やっぱりそれなりの理由があるからで。

「今回の黒幕かもしれないね」

《確かに、あのような年齢の少女が特別な理由なしにこんなことをするとは思えません》

僕たちだってユーノを手伝うためにジュエルシードを集めている。では、彼女は自分のために集めるのか。それとも別の誰かのために集めるのか。

「本人に聞くしかないか……」

しばらく物思いに耽っているとなのはが帰ってきた。

「今回はちゃんと封印できたよ？」

《Yes》

レイジングハートの赤い球体に「Completed Number 2」と表示された。

「今回は私も普通に封印できたんだ。どうしてだろ？」  
小首をかしげる。

「それよりアーリンが無事でよかった」

いつの間にかなのはの肩に乗っていたユーノが言う。

「おまえは今までどこに行ってたんだ？」

「実はあの子の使い魔と交戦していたんだ。なのはには先に向かっ

てもらって」

「なるほど。じゃあ今回到着に少し時間がかかったのは、そのせい？」

「にやはは、実はユーノ君がアリサちゃん達に捕まってなかなか離れられなくて」

「そうか、なら仕方ないな」

アーリンとなのはが声をあげて笑う。

「僕はたまったもんじゃないけどね……」

げんなりとした口調のユーノだった。

「じゃあ、もう行こう？ みんななかなかアー君が帰ってこないって、心配してたし」

なのはがアーリンの手をとって歩き出す。

「あの子のことは聞かないの？」

つい先ほどまで交戦していた少女のことについて二人とも聞いてこなかったので、ふと疑問に思った。

「それはまた後で。おいしいクッキーがあったから、それを食べながらにしよう？」

そういうことねと納得しながらアーリンは元の場所に戻っていった。

ここはこの街のどこにでもありそうなマンションの空き室。誰にも怪しまれないように認知障害の魔法で仮のアジトにして寝泊まりや補給をするわけだ。

「不覚だったね。まさか、ファイトより早い奴がいるなんて」

「そうだね。でも次回からはしっかり回収しなくっちゃ」

アルフの言葉にファイトが小さくうなずく。

「でも、ほんとにごめんよ、あの白いのを通しちゃって。あいつが

いなければ回収できたんだろう?」

フェイトが受けたかすり傷を回復魔法で癒しながらアルフが問う。もともと家具が少なかった中で唯一このソファーだけは役に立った。基本的に寝るのも、インスタント食品で食事をするのも、こうして寛ぐだけにも使えた。

「そんなことない。あの青い子は強敵だった。一人だけで倒すのに時間がかかりすぎる相手だよ」

「でもどうしてはじめての奇襲をかわせたのか。それ以外は大体互角。完全に後ろをとったのに」

「本当にそれがナゾ。今度からは魔力量が多くて危険かもしれないけど白い子を狙っていくしかないかもしれない」

少し横になると言ってフェイトがソファーに寝っ転るとすぐに寝てしまった。やっぱり、今回の戦闘はそれだけシビアなものだったのだろう。

『フェイト、あんな女のためにどうしてここまで頑張るのかしら?』  
年相応のあどけない寝顔のフェイトに備え付けてあった毛布をかぶせる。

『あたしはフェイトの使い魔だから言うことは聞けるが。でも、もうそろそろ堪忍袋の緒が切れそうだよ……』

顔をそっとなでるとアルフも同じように毛布をかぶってそのまま、床で寝た。



## 温泉旅行と交わる思い（前書き）

相変わらず長い間お待たせしました。  
待っていてくれた人には感謝の言葉でいっぱいです。  
もういないかもしれませんがwww

## 温泉旅行と交わる思い

謎の襲撃者とファーストトンタクトをした翌日。高町家ではいつもと同じ朝を迎えていた。

例のごとく早起きしてアーリンは朝の鍛錬に出ていた。

「はあ……はあ……」

膝に手をつきながらも呼吸を整える。

「今日のアー君は頑張ったね。わたしと恭ちゃんのペースについてきてたし、大丈夫？」

「……大丈夫」

いつもは士郎がアーリンをリードしているのだが仕事の都合で今朝はついてこれなかったため、2人のペースで走ったのだが……。

アーリンの様子を見かねた恭也が言った。

「今日はもうやめておけ。そんなんじゃあ、学校に行くまでにぶっ倒れるぞ」

「そうだね、無理して倒れたら元も子もないし、今日はこれにてお疲れ様だね」

2人でごり押ししてくる。

「……わかった。じゃあ、見学してる」

一度言い出したら止まらない。ので無駄な抵抗はせずおとなしく降伏した。

「そういうことで、今日はわたし対恭ちゃんだね。よろしくね？」

「お手柔らかに……」

2人は道場の中央に立ち向かい合わせになり、構えをとる。いつもの2人からは想像できないほど、空気が静かに、そして冷たくなる。離れた場所に正座しているアーリンにも張り詰めた空気が伝わってきたほどだ。

そのまま少しの間だけが劇場の空気のように二人の静寂に意識が引き寄せられる。

「（そういえば……）」

時は流れ出す。構えの静から攻撃の動へ場の空気が変更された。

「（この二人って、どっちが強いんだろう？）」

見学は終了したのはを起こしていつものようにシャワーを浴びた。  
今は朝食。

「昨日の町内会で先日の道路崩壊事件の話になったんだが、警察でも犯人はつかめてないそうさ。あの崩壊具合じゃあすぐにでも見つかると思ったんだが」

「それって、ガス爆発ってこの間、聞きましたけど……」

「あの辺にはガス管は通ってないんだ。それに時間軸上では深夜の出来事、つまり、誰かが爆発の音で起きなくてはおかしい」

士郎と桃子が昨日の町内会の話をしている。約2人は内心ヒヤヒヤなのだが、誰も気づかない。

「それは深夜に限ったことじゃないと思うぞ。あれだけ崩壊してたらどんな方法だろうと誰かが起きていてもおかしくないはずなのに問題はだれが壊したかじゃなくて、どうやって壊したかだな」

「あれ、なのは、どうかした？ 顔色悪いよ」

「う、うんうん大丈夫だよ！ いつも通りの私だよ！」

「……」

これは、だめだ。

アーリンは一瞬だけ素に戻った。

「みんな注意してくれ。どこでどんな危険な人物がこの家を襲うとも限らない。わたしたち町内会でも警戒はするが用心に越したことはない」

士郎がコーヒーを啜る。

「犯人は特定できてはいないがあんな危険なことをするやつだ。夜

道を一人で歩かない、夜の外出を控えるを徹底してくれ」

士郎の忠告に家族全員で返事をする。

「特に、恭也とアーリンは犯人と思しき人に出会ったとしてもいきなり切りかかるな。わたしに連絡するか、警察に連絡してから犯人が確実に捕まる状態になってからだ」

「わかつてるさ、それくらい」

「はい」

「じゃあ、暗い話はもうおしまい。楽しいお話をしましょ？」

「楽しい話って何のこと？」

「実はね、アリサちゃんのお家のお母さんとすずかちゃんのお家のお母さんと一緒に温泉に行く話を聞いてね、今度の休日なんかがちょうどいいんじゃないかって。その日はちょうど喫茶店も定休日だし、あちらの家族も休暇みたいだからちょうどいい三重点の日なの」

「なるほどー。盛り上がりそうだね。わたしは勿論出席するよー」

と美由紀が、

「おれも大丈夫だ」

と恭也が、

「忍さんに会えるもんねー」

「うるさいー!!」

「わたしもー」

「ぼくも大丈夫、一緒に行けるよ」

となのはとアーリンが、答える。

「そうよかったわ、みんなで一緒に行けて」

どこか感慨深げにつぶやいた桃子。

いつもはどこかクールであり感情が表に出ない士郎がやさしく微笑みながら言う。

「わたしたちにも久し振りの休暇だ。楽しみだね？」

「ええ……」

士郎と桃子が熱っぽい視点を交じらわせる。

「はあ……。で、どこの温泉なのさ、母さん？」

恭也の質問に桃子が答える。どうやら温泉はここからは離れすぎることもなく遠すぎることもないような郊外にあるようだった。そこにある温泉宿で一泊二日の小旅行をするのだ。

「（マスター、ジュエルシードの件についてはいかがしますか？）」

休日。

アーリン達は郊外の温泉施設に来ている。

いまは、小学生組で旅館の温泉に向かっていた。

「温泉楽しみだね」

「そうね。それに私の家は洋館だから、こういう純和風の家は新鮮ね」

あとで探検しましょ？アリサが言う。

「そうだねって、どうせ大人は大人で楽しんでるんだからぼくたちはぼくたちで楽しもうか」

しばらく木材独特の匂いのする廊下を行進する。途中、恭也と美由紀と忍にも出会い一緒に温泉に向かった。

しかし、奇妙な1人の女性に遭遇した。

「はい」

オレンジ色の髪の毛とこの旅館の浴衣をだらしなく着崩した格好をしている。

「君たちこんなところで何してるの？」

フランクな口調。

しかし、瞳には暗い影が宿っている、その不協和音がこの場にい

る者の心を、

グラグラと不安定にする。

「誰だ？見ず知らずの人間に話しかけてそんな態度では何がしたいのか、わからないな」

「そうね、あなた礼儀つてものを知ってるのかしら？」

「……残念ながらあんたたちには、用はないの」

視線だけがこちらに向けられる。

「そっちのお嬢ちゃん達のほうなの」

「……なのは達に何の用なのよ？」

「そんなにカツカしなくても、手を出すようなまねはしないわよ」  
なのは達をかばうように美由紀が前に出た。

「これからは……」

獲物を舐めまわす様な、視線と、

「オイタは控えるように……」

仄暗い音声。

じゃあね、それだけ言って満足したのだろうか、その人物は廊下をアーリン達とは反対に歩いていった。

「全く、おかしなやつはどこにでもいるものだな」

「そうね。せつかくの温泉気分が台無しになっちゃたわ」

「でもさあ……、みんなを助けた時の恭ちゃんはかつこよかったね、ね、忍さん？」

「美由紀！？お前、いきなり何を言っ……」

「そうね。本当にカツコよかったわよ、恭也くん？」

「なっ！？」

一気に顔が真っ赤になる。「ムッフ、よかったじゃない？」

「そ、そんなこと言っけると置いて行くぞ！」

恭也は赤い顔を忍から隠すように一人歩いて行ってしまった。

「もう、照れなくてもいいのに」

美由紀が追いかける。

「あのね、アーリン君」

忍がアーリンを呼ぶと、

「さつきは、何とかなっただけど万が一の場合はね、」

友達と同じ匂いがして、

「妹たちのことを守ってあげてね？」

子守唄と似ている、優しくて、しつとりとした声で、

「もちろん……です」

「うん。じゃあ、まかせたわ、お義弟くん？」

夕方になっても平穏な時間が流れた。

いきものがゆっくりと、時間がゆったりとしたし、また違うモノ  
たちが起きてくる……

光から闇、白から黒、お天道様からお月さま。

幾何学的に対照的な、それでいて決して会うことのない背中合わせな関係が怪訝する……

深夜。大人組みのドンチャン騒ぎをやり過ぎてさっさと眠りに  
着いたアーリン達。酔っ払った大人の男性、三人の父親が「娘自慢  
大会」をおっぱじめ、なぜかしら、アーリンに審査員のお鉢が回り  
さらに、恭也からは無言の殺気を放たれアーリンの疲労は最高に達  
していた。

布団を見つけるなりバタンキュー。おやすみなさい……

「こいつ寝るの早いわね、もう寝息立ってるし」

「いつもこんな感じだけど？アー君、起きるのも早いし、バツて寝  
て、バツて起きる感じかな？」

「そうなんだ。でもさっきのお父さん達のアレ、わたしたちが恥ず

かしかったよね？」

「あそこまで露骨に言われるのはきつと誰でも恥ずかしいわよ『私の天使』なんて言った時はあきれちゃったわ」

「まあまあ、愛されている証拠ってことでアリサちゃん許してあげてよ」

「あんなに、人前で、恥ずかしいこと言っただけなんにも感じないのかしら？せめて、わたしたちのいないところでやってほしかったわ……ママ達がいなかったら、もっとひどいことになってたわよ」

「どうやら人前で自慢されたのが自信家のアリサでも相当恥ずかしかったようだ。自分で言うか他人が言うかで違いがあるらしい。」

「さっきから何してるのかと思ったら、すずちゃん何してるの？」

「あ、アーリン君の寝顔、思ったよりもかわいいなって……」

「そういえば、男の部屋は衛生環境がよろしくないからって一緒に部屋になっちゃったのよね……私にも観せなさいよ？」

アリサが寝ているアーリンに近づいた。

「ぐっすり寝ちゃって、寝顔はほとんど女の子だね。起きてればかつこいいところもあるのに」

「本当。ほらみてよ、ほっぺがぷにぷに……」

「あ、アリサちゃんずるい。私も触りたい」

アリサとすずかが寝ているアーリンの頬を指で突いたり、つまんだりしていると、

「だめだよ2人とも。アー君が起きちゃうよ」

なのはが咎める。

「大丈夫。あれだけパパ達の騒ぎに巻き込まれたんだからよっぽどのとこがなきゃ起きないわ。さっきのあの質問にも答えてないし、その罰よ」

「私も気になってるんだよね、結局誰が一番かわいいのか。顔が真っ赤になっておろおろしちゃって答えられずにそのまんま寝ちゃうし、なのはちゃんもそう思うでしょ？」

「ふえ?!なんで私？」



「それくらいわかるわよ。ずっとアーリンのこと見てたじゃない」  
なのは顔が赤に染まった。

「そんなに照れなくても、血が繋がってるわけじゃないんだから気にしなくてもいいんじゃない？」

「だってアー君は家族だし、血のつながりの前にそんな気持ち自体が……」

「そんなのも気にしないでいいんじゃない？ 本人が満足なら、それが一番いいことなの。少なくとも私は自分が好きでもない男と結婚なんて絶対イヤよ」

「アリサちゃんらしい意見だね。私も結婚相手ぐらいは自分で決めたいな、お姉ちゃんみたいのは憧れちゃうな」

しばらく3人で結婚について話したが夜も遅かったので誰からともなく眠りに就いた。

ただの闇が広がっている。

ただ独り、月がぼつんと夜空に穴をあけるだけで……

「（あれ、夢かな？）」

今まで幾度となく経験した不思議な感覚。現実感のない世界がアーリンの体を包んでいた。

「（まあ、いつもならすぐに目覚めるだろうけど）」

大概こんな感じの夢は『あの声』がして終わってしまう。会話ではなくただ声が聞こえるだけなのだ。

叫びのような。

歓喜のような。

悲鳴のような。

でもどれかはわからない、すぐに忘れてしまうから。

「（誰なんだろうか？）」

いまさらな質問だ。

しかし、答えを聞くこともなく、そもそも質問自体を忘れてしま  
って行く……

もつじき夢から覚めそうだ。

《…スター、マスター!!》

「う……」

《起きてください!》

「う……ん。なんだ、どうかしたのか?……アルバス」

《のんきにしている場合ではありません。先ほど、ジュエルシード  
の反応が出たのでなのはさんが先行しているのですがどうやらあの  
襲撃者と交戦状態になったようです》

「なんだって! 本当か!」

《お静かに。真偽のほどが確かではありませんのでマスターに直接  
確認していただかないと》

「ああ、解ったよ。クソッ!」

アーリンはそのまま飛び出した。

辺りは暗く途中にある街灯が、ぽつんぽつんと光っているだけで  
それがないければ自分がどこにいるのか迷いそうになってしまう。

「なのはの反応は……あっちか!」

すぐ近くには結界が張られている。やはり戦闘状態になっている  
ようだ。

「間に合ってくれよ!」

結界に飛び込んだ。

そこでは、今様になのはがあの少女に刃を向けられていた。

「……どうやら援軍が来たみたいだね。でも、勝負は私の勝ち」

間違いなくあの時の少女だった。

深紅の瞳と、金糸の髪。

レイジングハートからこの間収集されたジュエルシードのうちの  
一つが少女の黒い窯に納められた。

「もう、わたしたちの前の現れないで。この次は止められるかどうか  
わからないから……」

そう言って背を向けようとするが、

「待って！あなたの名前を教えて！私は高町なのは知っているの！あ  
なたは？！」

「私はテストロッサ。フェイト・テストロッサ……」

もう来ないでと言い残して彼女はそのまま去ってしまった。

「なのは！無事か？！」

緊張の糸が切れたのだろう。そのまま体を支え切れずに空中から  
落ちてしまう。

地面と激突する直前にアーリンがキャッチする。

「アー君？」

見たところ外見に大きな出血はなかった。BJも多少は焦げている  
がそれでも無傷に近いのは奇跡的だろう。

「ごめん……負けちゃった」

「気にしなくてもいい。強いやつに負けるのは当然なんだし」

まずは傷の手当てだ、ということではいつものあいつを探す……

「こっちだよ、僕は」

物陰に隠れていたユーノが顔を出した。

じゃあ頼むわとなのはへ治療魔法をかけてもらう。

「良かった重傷じゃないみたいで。相手も非殺傷設定だったみたい  
だね」

「あの子はこちらを殺すつもりはないみたい。でもどうしてこんな  
危険なものを、わざわざ戦ってまで……」

「うーん。どうしてかはわからないけど、僕が見た感じ何かに焦っ  
ているようだったよ」

「焦る？」

「何に焦るかまではさすがに分らなかったけどね」

しばらくすると治療魔法も終了した。

いつの間にか、なのはは小さく寝息を立てている。よほど切迫した戦いだったらしく、無理もないとは思うが……

「こうなるのは予想できたけどね」

寝ているなのはをアーリンが背負って運ぶことになった。

「今回戦闘はできてないし、僕は運べないし」

《遅刻してしまった分のペナルティーだと思ってください》

わかったよ、と言ってなのはを背負って旅館に戻った。

まだ、当分夜明けを迎えそうにない。辺りは吸い込まれそうな暗闇に包まれていた

とあるマンションの一角で。

「今回はうまくいったね、フェイト」

「うん、このまま一気に集めれちゃえいいけど」

今回は一度あの子たちについて行って『警告』をするつもりだった。もうこれ以上わたしの作業をざまされないために。

あの子たちのためにも。

お母さんのためにも。

「あいつら、また来ると思うかい？」

「どうだろう？できれば来てほしくないかな。せつかく警告もしたし」

あの……なのはって子の方は魔力値が高いだけで、戦いに関しては素人だった。

問題はもう一人の蒼い子の方。

「出来れば、もう面倒なことは増やしたくない。お母さんとの約束が近い」

残された時間はあと少しだけ。

もしも、私が約束を守れなかったら……、どうなるの？

簡単なことだ、考えなくてもわかる。

残された時間とお母さんの優しい笑顔が、記憶が掌からこぼれていつてしまう。水と同じように二度と元に戻らないとしたら？

「そんなこと絶対いやだもんね」

じゃあ、もう寝るよ。

ああ、おやすみなさい、フェイト。

そうだ、私にはアルフも付いているんだ。

だから、絶対に大丈夫だよ。

だから、あの頃の優しいお母さんに戻ってくれるよね？

フェイトの頬に一滴だけ、涙が流れた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7304m/>

---

魔法使いの少年

2011年2月6日02時55分発行